

2019（令和元）年度 学芸員等在外派遣研修実施報告書

国立西洋美術館
邊 牟木 尚美

2019（令和元）年度学芸員等在外派遣研修の実施結果について、下記のとおり報告します。

1 研修テーマ

大英博物館を中心としたイギリスの博物館・美術館におけるコレクションの先進的な保存修復マネジメント、および、欧州における金属文化財の復元と保存修復についての調査研究

1. 先進的な博物館経営の在り方
4. 先進的なコレクション・マネジメントおよび資料管理の在り方
6. 目録記述、電子化目録の標準化、データベース、ドキュメンテーション等、博物館情報資源のウェブ活用方策

2 研修期間 2019（令和元）年6月23日～2019（令和元）年9月22日

3 研修概要

（1）研修先の名称

（ア）イギリス 大英博物館

- ① コレクション・ケア部門 保存修復アドミニストレーション室
- ② コレクション・ケア部門 陶磁器・ガラス・金属保存修復室
- ③ コレクション・ケア部門 石材・壁画・モザイク保存修復室および複製制作室
- ④ コレクション・ケア部門 予防保存室
- ⑤ コレクション・ケア部門 コレクション・マネジメント室

（イ）イギリス ブリストル市立博物館・美術館、および、M shed（＝旧ブリストル市立産業博物館）学芸部門、および、保存修復・予防保存部門

（ウ）イギリス サリー州 ジャクソン彫刻保存修復有限会社

（エ）イギリス オックスフォード アッシュモリアン博物館 保存修復部門

（オ）イギリス サリー州 ハンプトン・コート・パレス（ヒストリック・ロイヤ

ル・パレス・グループの一つ) 保存科学部門、および、保存修復処置部門

(カ) 「ICOM-CC Metal2019 (国際博物館会議 保存修復部門 金属保存修復ワーキング・グループ) トリエンナーレ・ミーティング」 (於: スイス ヌーシャテル ホイテ・エコール保存修復大学)

(2) 研修の内容

今回の研修の受入先は、英国のロンドンにある大英博物館のコレクション・ケア部門である。保存修復室の含まれるコレクション・ケア部門では、これまでに実践的保存修復作業を行う学生インターン等以外、筆者のような保存修復 (特にマネージメント) に関連する理論的調査研究を行う研究者を受け入れた前例がなかった。

本研修は、コレクション・ケア部門に客員研究員として滞在し、上記 3 つのテーマに沿った運営関連および保存修復関連の内部資料の自己調査研究を基礎とする。内部コンピューター・システムからの過去資料の入手・整理・理解に努めた後、保存修復の様々な活動にかかわる各部門のメンバーへのインタビュー実施、作業現場や施設見学、コレクション展示見学などを通して、大英博物館の各担当者から各自の役割や業務、さらに各部門の業務体制や運営について話を伺うことで、大英博物館の保存修復マネージメントについて全体像および詳細を把握することに努めた。

また、大英博物館は先進的な運営を行っている機関ではあるものの、あまりにも巨大な組織であるため、筆者の勤務する国立西洋美術館と大幅に異なる点が多い。よって、大英博物館だけに留まることなく、英国内の大英博物館以外の博物館・美術館および組織の保存修復部門の訪問調査も同時に行った。対象の組織の選択には、何等かの点 (組織の規模、職員数、コレクション数やタイプ、資金源、立地—首都圏・地方都市、方針等) で国立西洋美術館と似通っている組織を優先した。訪問調査は基本的に半日間ないし 1 日間で、保存修復室長に運営や組織についてのインタビューを行ったり、保存修復や保存科学メンバーに施設案内をしてもらったり、業務について説明してもらったりして、各組織の保存修復部門の全体像を把握し、ケース・スタディとして情報を収集した。

さらに、金属文化財の保存修復・調査研究について、世界的な動向の把握およびネットワークの構築、さらに日本の金属文化財の保存修復実態について情報共有を行うため、「ICOM-CC Metal2019 (国際博物館会議 保存修復部門 金属

保存修復ワーキング・グループ) トリエンナーレ・ミーティング」に参加し、筆者が日本で携わった金属文化財の保存修復プロジェクトの口頭発表を共同研究者と共に行った。

(3) 研修の成果

本研修の成果は、上記の研修内容に則し、1. 機関概要、2. 保存修復の役割・業務、施設・設備、機関毎に報告する。

(ア) 大英博物館

<概要>

大英博物館は 1753 年にハンズ・スローン卿が蒐集した 71,000 点にのぼるコレクションを基礎として設立された世界初の一般大衆向けの国立博物館である。イギリスの国立博物館の中でも中心的な存在であり、さらに、世界的にも大変有名な博物館である。現在では多岐にわたる世界の文化と歴史を網羅的に蒐集した約 800 万点のコレクションを保有し、昨年度は 6,000 万人の来館者を記録している(約 3 分の 2 が海外からの来館者)。開館当初から入館料は無料であり、現在でも特別展を除いて来館者から入館料を徴収していない(任意の寄付は募っている)。常設展示には約 15 万点のコレクションが展示されていると言われており、驚くことに休館日は 1 月 1 日、Good Friday (聖金曜日、イースター前の金曜日) およびクリスマス前後 3 日間の年間 5 日間のみである。昨年度は英国内 105 か所に約 2,800 点を、英国外 79 か所に 2,400 点ものコレクションを貸し出している。監視員・警備員を除いても、職員が約 800 人も在籍していると言われてしている。

大英博物館の保存修復およびそのマネージメントにまつわる近年の変化は、主に 3 つ挙げられる。1. コレクション・ケア部門の新建物の建設に伴う人とモノの一極集中化、2. 大規模な組織改編、3. 情報管理システムのリニューアル、である。

<1. コレクション・ケア部門の新建物の建設に伴う人とモノの一極集中化>

新建物は「世界保存修復展示センター(以下 WCEC、World Conservation and Exhibitions Centre の略)」と名付けられ、大英博物館の敷地内北西部に位置した地下を含む 9 階建ての L 字型をした建物である。2009 年に施工案が可決され、考古発掘調査を含め 6 年間の歳月をかけ建設され、4 年前の 2015 年から本格的に使用され始めた。現在 WCEC が建っている土地は、以前、書籍装丁の建物があった場所と聞いている。大英博物館が収蔵していた書籍を 1998

年に大英図書館に移管するまで機能していた場所であった（大英図書館との関連については、今回の研修の対象外であるので未調査）。



WCEC 建築前



WCEC 建築後

大英博物館ウェブサイトより

https://www.britishmuseum.org/about_us/the_museums_story/new_centre.aspx



WCEC 外観

このビル建設以前は、保存修復部門は博物館の敷地に隣接する別棟、および、博物館から離れた他の場所に設けられた保存修復部門兼収蔵庫で各素材のセクション（金属・陶磁器・ガラス修復、有機素材修復、石材・壁画・モザイク修復、東洋美術修復、保存科学、予防保存、ドキュメンテーション、アドミニストレーション等）が別々の場所で活動していた。現在では、東洋絵画美術修復を除くコレクション・ケア全てのセクションがこの敷地内に新築された WCEC ビル一棟に入居している（東洋絵画美術修復は、「平山スタジオ」と呼ばれる敷地内別棟での活動を継続している）。

人の活動を一極集中するだけでなく、モノの集中化も現在進行中である。郊外にある収蔵庫から WCEC 建物内に新たに設けられた収蔵庫へコレクションの移送プロジェクトは継続的に進められており、この移送の機会に保存修復家らが協力し、コレクションの状態を評価したり、簡易クリーニングを行ったりもしている。また、移送チームはコレクションの保管状況の刷新も行っており、特に有機素材コレクションは保管箱や保管に使用する梱包資材を新調すると共に、収蔵品の劣化を最小限に抑えつつ、モノと情報管理をし易

いよう様々な工夫を凝らしている。

<2. 大規模な組織改編>

大英博物館では 2019 年 3 月に大規模な組織改編が行われた。コレクション・ケア部門の役割は 2 つに大別できる。一つは「コレクション・アドミニストレーション（コレクション管理運営）」と呼ばれ、コレクションの進行や手順に関わるものであり、収集・ドキュメンテーション・写真撮影、損傷・紛失・売却、貸出や借入に携わっている。一方、「コレクション・ケア（コレクション保護管理）」は、物理的・技術的視点に立ったコレクション運営をしており、収蔵庫・展示室・保存修復、額に入った作品・染織品・重量物の扱い、事故や緊急事態への対応が含まれる。

コレクション・ケア部門の傘下には、2019 年 9 月現在、7 名の各室長が在籍している。西洋絵画修復、東洋絵画修復、石材・壁画・モザイク修復、有機素材修復、無機素材修復（空席）、予防保存、コレクション・マネジメント、写真撮影、保存修復全般（空席）である。

組織改編前は、Department of Conservation and Scientific Research（保存修復・科学調査部門）として、保存科学調査室が保存修復室と同じ部署内に属していたが、今回の組織改編により、保存科学調査室と保存修復室は分かれて、異なる部署となった。

さらに、コレクション・ケア部門の事務全般を担う Administration of Collection Care and Science（コレクション・ケアおよび科学部門管理運営室）の改編も同時に行われた。

<3. 情報管理システムのリニューアル>

大英博物館のコレクションにかかわる情報（目録）、オブジェクトの写真および関連画像、過去の保存修復処置報告などの検索や編集を行うには、大英博物館が独自に開発した 3 つのソフトを使用することができる。そのソフトウェアとは、1. 内部向けコレクション情報カタログである「MI+（エムアイプラス、Museum Index Plus の略）」、2. 同じく内部向けコレクションおよび関連情報の保管・検索・閲覧を行うための「ODIN（オーディン、Digital Asset Management System）」、3. 上記 2 つのソフトから一般的情報を抜粋した一般公開されている「COL（クール、Collection Online の略）」の 3 つである。COL では作業が進み、コレクション 800 万点中、約半数の 400 万点の情報を一般の人々が博物館外部からも検索・閲覧することが可能になっている。

https://www.britishmuseum.org/research/collection_online/search.aspx

これらのソフトは一般に流通しておらず、ここ数年、IT チームが更新プロジェクトを推進している。特に、「MI+」は2年前に導入されたばかりで、以前使用していた同じく独自ソフト「Merlin(マーリン)」の後継ソフトである。

「Merlin」は、筆者が2005年に大英博物館金属保存修復室でインターンをしていた際に使用していたソフトであり、大変機能的に作られていたが、各自が情報を新規作成・編集する作業は工程が多く、大変複雑であった。

以前は、「ODIN」のような総合的な画像管理システムはなかったが、これら3つのソフトを導入している理由は、組織内で情報を集中させることにより、重複を防ぎ、データ量を管理するためである。重複を防ぐ作業は、コンピュータが自動で行っているとのことである。

近年のデジタル機器とその情報の拡大化のスピードは著しく、しかしその一方、それらの情報管理のスピードが追い付いていないのはどの組織も同様である。国立西洋美術館の学芸課や保存修復室だけでも、多くの情報の重複が散見でき、特に解像度の高い作品写真を多く保管する必要のある保存修復室ではこの問題は特に深刻であり、組織全体のコンピューター・システムに脅威を与えていると思われる。大英博物館の情報の一極集中による重複防止という考え方はとても参考になり、我が館でのコレクション情報管理にも役立つ点が多い。

これらの独自ソフトを使うには、IT チームが行うトレーニングに参加した後、使用権限が与えられる。業務により内容により、編集ができるレベルや閲覧のみ可能なレベルに分かれており、筆者は過去の保存修復報告や関連画像を検索する必要があったため、MI+および ODIN 両方の閲覧のみ可能なレベルのトレーニングを受講した。

運用後にも IT チームが徐々に改良を加えており、使用者の意見を取り入れつつ、改良版への移行期間を設けつつ、使用しやすい形に改良を続けている。

<見学・インタビューを行った各室>

コレクション・ケア部門および科学部門 管理運営室

コレクション・ケアおよび科学部門管理運営室長である Ms. Corinne Stritter から詳しい話を聞いた。Stritter 氏は今年 3 月の組織再編時に新たに現ポジションに採用されている。コレクション・ケアおよび科学部門管理運営室は、コレクション・ケア部門には属しておらず、「Collection Projects & Resources Administration (コレクション事業および資源管理運営)」という部門に属しており、そこから WCEC に派遣されてコレクション・ケア部門と科学調査部門の近くで仕事をしている。以前は、それぞれの部門にそれぞれの管理運営部門があったが、部署により管理運営サービスの質や量や方法に差があった。それを集約化・平均化・効率化することを目的として組織編成が行われた。

仕事として、予算執行管理、オフィスおよび保存修復物品施設管理、出張予約、安全衛生・火災安全管理、イベントのサポート、部署内会議アレンジや連絡等である。基本的には各職員が主体的に行うことを、必要ならばサポートするという形をとっている。Stritter 氏の下には 5 名の職員がいる。昔よりアドミ職員数が減らされたが、仕事は増えているということである。

筆者は国立西洋美術館では保存修復室長として、殆ど毎日の時間を管理運営や調整などの仕事に費やしている現状にある。各室にアドミ専門の人材が一人ずつでもついていれば、専門を活かした取り組みに費やす時間ができ、保存修復も進み、展示・活用できる作品数が格段に増えるであろうと考えさせられた。

コレクション・ケア部門 陶磁器・ガラス・金属保存修復室

本研修のスーパーバイザーである Rachel Berridge 氏 (主任保存修復家、伝世金属製品担当) に、陶磁器・ガラス・金属の保存修復室 (以下 CGM、Ceramics/Glass/Metals の頭文字をとった略) の仕事の進め方についてインタビューを行った。

この CGM にはメンバーが 8 人在籍しており、3 人が陶磁器・ガラス保存修復専門、5 人が金属保存修復専門 (うち 2 名が伝世品専門、3 人が考古遺物専門である。CGM で一つの保存修復室を共同で使用している。

大英博物館の保存修復作業の目的としては、大まかに分けて「展示」「貸出」「保存」の 3 点である。保存修復の仕事は形式上、年間計画を立てて進めている。以前のライン・

マネジャーは優先順位等を周囲と相談して、保存修復メンバーのうち、誰が、いつ、どのくらいの期間で、何の修復を行うのか事細かに時間で計画を立てていた。しかし、緊急の飛び込み仕事や思ったよりも時間がかかる修復作業などもあるため、年度の終わり頃になるといつも仕事が沢山溜まってしまう状況であった。現在は、CGMの室長は空欄であり、石材・壁画・モザイク保存修復室長のNicholas Lee氏がライン・マネジャーとしてCGMも統括している。もっと時間に余裕を持たせた計画を立て、急ぎの案件にも対応できるように年度計画を作成している。

保存修復の内容については、お金を生み出す目的の作品貸出や展示などの修復や一般の来館者向け特別サービス（例：開館前の博物館友の会メンバーへの保存修復室ツアーなど）が優先される傾向にある。

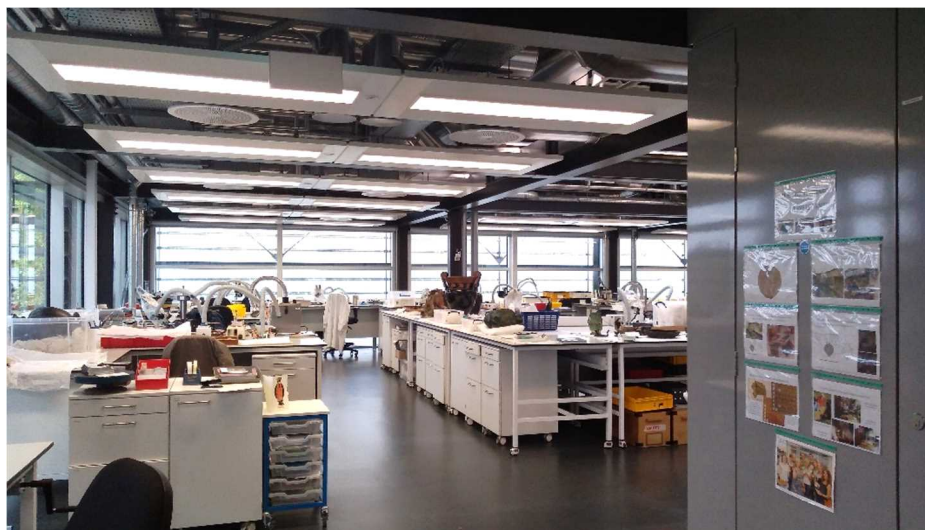
貸出候補作品が貸出できる状態にあるのか、展示に出せる状態であるのかどうかを評価することも保存修復家の役割の一つである。年間2,800点も作品を館外に貸し出している大英博物館では、貸出可否判断はかなり時間を費やす作業であろう。貸出希望作品リストにある作品は、なるべく実物を見て可否判断しているが、見ないで判断する場合もあるという。また、状態がよくない場合、作品の保存修復作業が必要にもかかわらず貸出期限がギリギリで修復作業が間に合わない場合、貸出期間が長すぎる場合等、貸出不可の判断も下すこともあるそうだ。

以前は、作品貸出や展示のためだけでなく、定期的に（3年に一度）インターンを含めた保存修復チームと予防保存チームが共同で収蔵庫内の作品状態の悉皆調査を行っていた。現在CGMからは2人の保存修復家が外部収蔵庫からWCEC新収蔵庫への作品移送事業に関わっているが、全員での悉皆調査を行うことはなくなったため、現在の多くの収蔵作品について作品状態は把握できていないということである。

展示や貸出の可否判断や、保存修復の必要性がある作品を収蔵庫や展示から保存修復室へ移動させるのは、全て後述のコレクション・マネージメントチームの仕事である。作品移動は単純作業であるものの、多くの労力と時間を使う大変な作業の一つである。日本の殆どの博物館・美術館には、館内の職員として作品移動を行うだけの役割を担っている専門家は皆無である。そのため、日本では（少なくとも筆者の勤務する国立西洋美術館では）多くの場合は保存修復室メンバーで作品移動を行い、少し手が必要な場合は学芸員の手伝いを請い、我々では取り扱えない大型作品などについては輸送会社の美術梱包専門家に依頼を行っている。さほど大きくない規模の国立西洋美術館でも、絵画作品を収蔵庫から保存修復室へ運ぶだけで、1時間はかかってしまう。保存修復家として作品の保存修復作業に集中できる環境が整っていることは、仕事の効率化につながり、大変重要なことであると感じた。

どの材質の保存修復室にも、手書きで書き込める台帳があり、作品の保存修復室への出入りを管理する記録手帳である。コレクション・マネジメントチームが持参した作品と所蔵品番号、日付、移動者名・受取人名を明記するようになっている。保存修復作業が終われば、またコレクション・マネジメントチームが引き取りに来て、台帳に在庫記録を残すのである。勿論、作品情報検索システムの ODIN には現在地を記入する箇所があるため、コレクション・マネジメントチームが場所を変更する形である。

また、スタッフはどのような作業をおおよそ何時間行ったかという月間報告書を作成し、ライン・マネジャーの Lee 氏に提出している。Lee 氏の部下の数が多いため、個々の作業状況を確認するためでもあるが、保存修復家自信の記録にもなり、進捗状況の記録や今後の見積もり時間算出時に参考になるであろう。



CGM 保存修復室（3方向から自然光が入り作業しやすい）

コレクション・ケア部門 石材・壁画・モザイク保存修復室および複製制作室

8月28日（水）午前中に、大英博物館内ウェブ制作室およびディベロップメント・チームへの石材・壁画・モザイク保存修復室ツアーに参加させていただいた。外部および内部向けにウェブページを更新する必要があるため、館内の他部署の人にも説明会を開催することもある。

WCEC の地上階に位置しており、重量物や大型作品を取りまわすのに必要な広いスペースと十分な高さが確保されている。大型や重量作品が多いため、男性が多いと思ったが、5名全員女性である。室長の Nicholas Lee 氏だけが男性であるが、室長は調整業務に忙しく、残念ながら殆ど保存修復作業をする時間が取れないのが現状である。女性

だけで重量物をどのように移動させたり、ひっくり返したりするのかと聞いてみたところ、「力は使わず、頭を使う」との回答が返ってきた。てこの原理を利用したり、写真右側にある昇降式の台車を複数台使用したりすれば、何百キロという重量物でも簡単に移動が可能ということであった。少しの工夫で、時間や人件費の節約をしており、見習いたい点が多かった。

本部署では、作品自体を傷つけずに表面のクリーニングを行うために、レーザーを用いることもある。その使用法は時間の関係で見逃してしまったが、またの機会に見学しに行く予定である。レーザークリーニングに関しては、大英博物館の以前の保存科学・保存修復部門が作成した「ワールド・ヒストリー・ラボ」というブログが参考になる。

<https://worldhistorylab.britishmuseum.org/laser-cleaning-of-a-wall-painting-from-byzantine-egypt/>



大英博物館内ウェブ制作室メンバーのためのツアー
(石材・壁画・モザイク保存修復室ツアー)



重量物を移動させるのに使用する
昇降する台車

複製制作室 複製制作専門家の Michal Neilson 氏に、複製制作の目的や使用材料と使用技術、これまでの行った複製で展示に出ている作品を展示室と一緒に回って解説していただいた。

複製制作室は、WCEC 地上階の石材・壁画・モザイク保存修復室の一角に位置しており、主に3次元の無機物の作品の複製を作成している。彼が大英博で仕事を開始した30年近く前には2人体制であったが、現在在籍しているのは Neilson 氏1人である。時に保存修復の大学生や大学院生のインターンを取るときもあるそうだが、大英博の若手職員に技術を伝えられずに定年を迎えてしまう可能性があることが、一番の心配ごとであると話してくれた。

大英博では、コレクションの複製を作成することが多々あるため、専門家が配置され

ている。複製作成の目的は、大まかにわけて4つあり、1. 代替品としての展示、2. 作品保護のための複製品貸出、3. 発見地に残す代替品、4. 教育用、である。1つ目の目的の「代替品としての展示」は、特に主要作品を館外に貸出する際に、代わりに展示するものである。大英博には世界中から目的の作品を見に来る来館者もおおり、お目当ての展示品がなかったり、貸出中というメモだけが残されただけだったりしたら、気を落とすであろうとの配慮によるものである。近年は展示品である旨は明記されて展示している。2番目の作品保護のための複製品貸出は、大変脆弱な作品や重量物に貸出リクエストがあった際、作品保護のためにお断りをするのではなく、相手先との合意の上で複製品を貸し出す場合もある。3番目は、イギリスでは国家的に貴重と思われる重大な発見がなされた作品・作品群（例えば Sutton Hoo 遺跡。イングランドの北西部で発見された7世紀アングロサクソン時代の船葬墓。）は、大英博を含めた国立博物館に所蔵する規則がある。発見地の博物館に何も残らなくなる事態を招かぬよう、複製品を作成して現地博物館での展示を可能にしている。4番目の教育用だが、通常は作品保護の観点から作品に触れることは固く禁じられている。しかし、触れることにより得られる情報も多いことから、必要とされるものは教育用の複製品を作成して展示し、積極的に触れる体験を奨励している。

現在の複製作成方法と使用材料は、主に石膏型とシリコン型を組み合わせた樹脂 casting や、シリコン型を利用した電機 casting である。双方とも、オリジナルの詳細までを完全にコピーできる方法で、手間は大変かかるものの、いまだに金属製品の詳細が重要な作品については複製を現役で行っている。電気 casting 法は、1800年代初期に発見された電気鍍金（めっき）の方法を応用し、厚さをとても厚くしたものである。大英博では、1850年代から電気 casting 法による複製品の作成を始めている。現在では樹脂を使用した複製も多いが、最終的な色合わせの補採は Neilson 氏の手で色付けされている。



電気 casting による作品の複製制作（途中）



ヘルメットの複製を作成した時の型

現代のモノの複製方法といえば、3Dプリンターが有名である。大英博では3Dプリンターを使用した複製作成は行っていない。3Dプリンターで作成した複製品も精巧に

できているように見えるが、どんなに細かく3D情報を作品から取得しようが、デジタル画像は細かい四角の画素の羅列のため、3Dプリンターで作成した作品表面は全くオリジナルと異なりザラザラした感触になる傾向にあるからである。勿論、表面をサンドペーパーで磨いて滑らかにすることも可能であるが、発生する粉末は人体に有害な物質であることがわかっているため、健康安全基準に特に厳しい大英博では3Dプリンターを使用しないそうである。

展示室でしてくださった解説では、エジプトの夫婦像の欠損した手部分のエピソードを話してくださった。大英博の学芸員がエジプトの作品を研究中に、手のかけらがどうも大英博の像の手に似ているので現地へ一緒に行って型を取って複製を作成してほしいと頼まれたため、一緒にエジプトに行き、かたどりをしたそうである。学芸員の予想は見事に当たり破断面がぴったり合ったという。現在はその複製の手は、オリジナルの像に取り付けられ、展示室内に展示されている。

また、Neilson氏は、自分でモノをよく観察して自分の手で複製品を作ることによって、人類が過去に持っていた素晴らしい制作技術や歴史をモノから学ぶことができるという。職人によって制作された手作りの技術を尊敬すべきであり、このような技術は是非次世代に残していきたいと考えていると話してくださった。



展示室で展示品を見ながら複製の説明をするNeilson氏（右）。来観客も興味を持って聞いている。



展示されているウルのキャスケットの複製（右側の小さいパネルに「オリジナルは研究のために移動。これは複製」と明記されている）



展示室内に設置されたハンズ・オン展示（教育目的の複製）



ハンズ・オン展示デスクで作品の説明をする担当者と説明を聞く親子（別日に撮影、参考）



展示ケースに内のエジプトの夫婦像



手の部分のみエジプトで型を取ってきて作成した複製

コレクション・ケア部門 予防保存室

8月29日（木）午前中に、予防保存スタッフの一人である Fabiana Portoni 氏に施設案内、および、業務説明をしていただいた。彼女は2018年2月から現在まで、博物館展示室・収蔵庫内の温湿度環境の管理を担当している。2015年からは2018年までは、遠隔地にある収蔵庫から WCEC 内新収蔵庫へのコレクション移動プロジェクトの一員として仕事をしていたため、新収蔵庫での収蔵方法の工夫などもお話いただいた。

予防保存室は WCEC6 階の一角にオフィスを持っているが、実践的な作業準備やモニタリングは建物内のラボで行っている。例えば、展示に使われる材質の酸性物質の使用の有無を調べるオディー・テストを行ったり、脱酸素剤や湿度調整剤を保管したり、温湿度のデータをモニタリングしたりできるようになっている。

一般的に、温湿度の急激な変化は、作品の劣化要因の一つである。特に乱高下するような急激な変化の反復による作品への悪影響は多大であり、温湿度が高くても低くてもある程度一定に保たれているようであれば、急激な変化の反復よりは、作品に与える影響は少ない。そのため、作品に使用されている材質毎に最適な温湿度をいかに一定に保ち、作品の劣化を予防するかというのが、予防保存室の温湿度管理者の使命である。

大英博物館の空調事情は、残念ながら、決して良いとは言えない。博物館の建物は大変古い建物であるため、全面的に空調が導入されているわけではない。温湿度の大幅な変化により劣化が促進される材質を多く展示している展示室など、必要な箇所から優先的に空調の導入を順次行っている。本研修は丁度夏季だったため、空調がない展示室の温度がいかに自然に高くなるか身を持って体験した。空調がないだけでなく、一番上の2階（日本で言う3階）は天井が一部ガラス張りになっており、多くの展示室は換気をする窓さえない。来館者も大変多く、人からの放射熱も室温を上げる要因となっている。そのような状況で博物館が展示室内でできる対処療法は、大型扇風機を回して室内の空

気の流れを作り少しでも来館者が涼しく感じられるようにすること、また、暑すぎる展示室を立ち入り禁止にして来館者からの放射熱を遮断すること、の2つである。勿論、恒久的にできる対策も既に施しており、天井の窓に作品に対して紫外線・遮熱カットのシートを張ることで紫外線を遮って太陽の熱での気温上昇を防ぎ、作品を大型・重量作品以外の殆どの作品は展示ケースに入れていて急激な温度変化による作品の劣化を極力防ぐ努力はしている。

空調のない展示室において、温度の調整は不可能であるが、相対湿度を調整することはできるため、4種の対策を取っている。1つ目は展示ケースの中に温湿度調整の機械を入れて調整している。2つ目はプロソープ (Prosorb) という湿度調整されたペレットが入ったカセットを展示ケースの中の見えにくいところへ入れておく方法である。日本の美術館・博物館でよく使用されているアートソープ (Artsorb) とほぼ同じ機能の製品だという。英国ではプロソープの方が手に入りやすく、空間に対する使用個数の計算が簡単であることが重宝がられている要因である (1立方メートルにつき1カセット挿入すればよい)。大きなサイズのカセットと半分の大きさのカセットもある。希望相対湿度により 40%RH~60%RH まで 5%刻みで商品が作られており、展示ケースに希望早退湿度のカセットを規定量セットすると数時間とたたないうちに、希望相対湿度が得られて安定するという。

温湿度環境モニタリングは、展示室の展示ケース内と収蔵庫の各所に設置した 700 個ものポータブル・データロガーで 5 分毎に遠隔測定して得られたデータが 15 分毎に Wi-Fi と予防保存ラボのレシーバーを通じ、専用ソフトに記録される仕組みである。近年、温湿度測定システムが刷新された。以前はデータロガー番号と温湿度データしか見られなかったが、新システムでは温湿度データは勿論のこと、設置場所 (部屋番号) とその設置場所に空調があるかないかが表示されるようになっている。通常、測定機器は正しい数値を測定するために、定期的に機器の校正 (カリブレーション) を行わなくてはならない。大英博でも 1 年に 1 度、2~3 月の気候が安定している時期に半分ずつを 1 週間ずつ、合計 2 週間かけて校正を行っている。

その他に温湿度環境モニタリングの媒体として、建物管理専門家が管理しているビルディング・センサーがある。展示室や収蔵庫の壁に取り付けられている温湿度計測器のことで、建物管理のエンジニアが管理している。予防保存室が管理するポータブル・データロガーとこのビルディング・センサーの計測値に齟齬がないかを確認している。

これらの測定の結果、夏季には空調のない展示室では 1 日に 20% も相対湿度に変化があるにもかかわらず、展示ケース内の湿度の動きは殆どなく安定している。展示ケースの気密性が極めて高いことを意味しており、この展示ケースで作品を展示している限り、湿度の大幅な変化と反復による作品の劣化を防ぐことが可能である。しかしながら、

調整できるのは湿度だけであり温度は調整できないため、室温程の大幅な変化はないものの、緩やかな温度変化は避けられない状況である。作品の劣化を少しでも遅らせるために、全展示室と全収蔵庫内に安定した空調が導入されることを願ってやまない。



温湿度管理について説明くださった
Fabiana Portoni 氏



展示室の壁に設置されたポータブル・データロガー
(上) とビルディング・センサー (下)

コレクション・ケア部門 コレクション・マネージメント室

このコレクション・マネージメント室に関しては、個人へのインタビューや施設・業務見学を行っていない。業務範囲が、今回の研修テーマからは多少外れるためである。そのため、大英博物館職員向けに毎週木曜日の朝に行われる自由参加の Staff Breakfast Talk (職員による職員のための早朝講義) で、コレクション・マネージメント室が業務紹介を行った際の内容を参考にした。

コレクション・マネージメント室の主な業務は、Care & Access と Loans & Display に集約される。メンバーは学術的知識や実践的な技術も身に着けている。

アクセスという意味では、収蔵・展示・保存修復・科学調査・研究のための作品閲覧等のために、館内または外部収蔵庫からコレクションを移動させたり、展示を行ったりする役割を担っている。コレクション・マネージメント室のスタッフは、以前はミュージアム・スタッフと呼ばれ、各学芸部門に所属していた。このミュージアム・スタッフというシステムが国立西洋美術館にもあれば、かなりの時間を保存修復や関連作業に費やせる素晴らしいシステムである。筆者は保存修復、写真撮影、科学調査など作品に何らかの処置を施す度に、保存修復家である我々が収蔵庫から必要な場所への作品移動をしており、かなりの時間と体力を費やしている。

外部の学術研究者のために、作品閲覧のためのスタディ・ルームの活動を担っているのも彼らである。学術研究者が閲覧をリクエストしてきた作品をスタディ・ルームへ運び、閲覧の助けをするのも彼らである。

ドキュメンテーションについても、コレクション・マネージメント室の役割である。

所謂レジストラと呼ばれる作品情報を登録・管理する役割も担っている。内部コレクション情報検索ソフトMI+に、学生（アルバイト）に120,000点分の記録を集中的に入力してもらい、作品情報へのアクセス（検索）が可能になった。

ローン（貸出・借入）業務も担っている。貸出前の状態調査（保存修復家によるものであるが、その手伝い）、状態調査記録写真撮影、展示の際のマウント作成や額入れ、輸送のためのクレーン作成や梱包、クーリエ業務、貸出先での展示作業（重量物の移送、展示を含む）など、殆ど全てを自前でこなしている。貸出先での作業は、言語や文化の違いから思うように進まないこともあり、大変な業務である。

(イ) ブリストル市立博物館・美術館、および、M shed (=旧ブリストル市立産業博物館) 学芸部門、および、保存修復・予防保存部門

8月14日(水)本格調査の事前調査。Bristol City Museum and Art Gallery (=ブリストル市立博物館美術館)。運営管理について概要のインタビュー。ギャラリートーク聴講。保存修復部門へ紹介していただく。

ブリストル市は、近年ロンドンに次ぎ人口の急激な増加率が一番高い都市と言われている。落書きをアートにしたバンクシーの出身地として有名である。

今回の訪問は、ブリストル市立博物館美術館の視覚芸術部門上席学芸員 Ms. Kate Newnham に受け入れていただいた。筆者のレスター大学大学院で博物館学専攻時代の実践研修先であり、保存修復大学院卒業後の夏休みに保存修復部門で3か月間ボランティアとしてシルバーギャラリー(銀器展示室)の改装時作品洗浄を行った博物館でもある。これまでは、学芸員、保存修復家としてだけでしかブリストル市立博物館を見てこなかったが、保存修復マネジメントや管理運営の視点から調査を行うには、規模的に国立西洋美術館と類似しているため、参考になると鑑み、この館を選択した。今回は事前調査として大枠を調査すること、および、コネクションを作り、次回の保存修復室本格調査やコレクションの保存における問題や解決策を調査する機会に備えた。

このブリストル市は下記5つの博物館・美術館・文書館(正確には7つの建物)を持っている(1 Bristol City Museum and Art Gallery, 2 M shed, 3 The Georgian House Museum, 4 The Red Lodge Museum and Blaise Castle Museum, 5 Bristol Archives and Kings Weston Roman Villa)。職員は各館に所属しているものの、他館での展示作成にかかわるなど、お互いの館で協力しあって職員の専門性を活かしながら、人材不足を補う形で共同運営を行っている。

Jon Finch氏(Head of Culture and Creative Services)として5組織をまとめる館長としてのポジションに就いており、その下に3名のDeputy Heads(副館長)が存在する。Head of Collections and ArchivesのRay Burnett氏が所謂学芸課のトップにおり、Curatorial(学芸、16名)、Archives(記録保管、17名)、Conservation and Documentation(保存修復およびドキュメンテーション、9名のうち保存修復家は4名)を従える形になっている。

その他、Phil Walker氏がHead of Engagementとして、教育普及、展示、イベント等を担当している。また、Zak Menson氏がコミュニケーション、フロント・オブ・ハウス(警備、受付)、アウトソース(カフェ、ケータリン

グ、場所貸出、ショップ、ウェブなどのデジタル) を担当している。

ブリストル市の6つの博物館・美術館・文書館は入館料が無料であり、入館料からの収入は望めない。財源は、ブリストル市から38%、イングランド美術評議会から25%、他37%が来館者からの収入(寄付、ショップ、カフェ、会場貸出、博物館友の会からの収入)である。残念ながら金額は明記されておらず、ウェブサイトには年報や事業報告書なども公開されていない。また、ブリストル博物館群発展財団を設立し、運営のための資金確保に尽力している。

Bristol City Museum and Art Galleryは1823年に設立され、2002年よりイギリス南東部のハブ機関としての機能も果たしている。コレクションは、応用美術、生物学、イギリス考古学、美術品、地質学、工業史・海洋史、社会史、世界文化など多岐に渡る。この博物館・美術館建物は主に1~3階の3階建ての長細い建物である。正面入り口には吹き抜けがあり、中間に階段を抜けるとさらにもう一つ吹き抜けがある。屋根の半分以上は摺りガラス張りだが、他のイギリスの博物館・美術館と同様、殆どの場所で24時間空調がついていない。近年の夏の異常な暑さと暑い日の増加により、以前は夏でも空調が必要ない気候であったが、近年はイギリスの博物館・美術館でも空調導入の必要性に迫られている。板絵のある展示室は空調と遮蔽ドアがあり、板絵にはマイクロクライメートボックスがかかっており、湿度の突然の上下に対応するようになっている。

ブリストル市立博物館美術館は、他のイギリスの博物館と同様に100年以上前に建てられた建物を使用しており、様々な施設問題に直面している。収蔵庫の壁は崩れ、何度も水漏れが起き、場所の不足や棚の不足からオブジェクトが危険にさらされている。

保存修復室は、Conservation and Documentation Departmentとして保存修復とドキュメンテーションが同じ部署となっている。Fran Cole氏が室長であり、保存修復家は紙保存修復家1名、予防保存専門家1名、絵画保存修復家1名、立体物保存修復家1名の4名体制である。修復家の数としては少なく、専門外のこともそれぞれが担当している。調査当日は、10月下旬開幕の彫刻の展覧会準備中で大変忙しい時期であったため、見学とブリストルで採用している彫刻修復および展示方法の説明のみしていただいた。10月末または、11月上旬に改めて保存修復室の本格調査をさせていただくことになっ

た。



Kate Newnham 氏による
日本の浮世絵特別展のギャラリートーク



入り口ホール



一新された銀器展示室



マイクロライメートボックスに
入れて展示されている板絵

8月15日(木) M Shed (旧 Bristol Industrial Museum=ブリストル市立産業博物館) 訪問。M shed (=ブリストル市立産業博物館) 訪問。市立博物館美術館の Ms. Kate Newnham より博物館の説明を受けながら見学。11:30-12:30 一般向け収蔵庫見学ツアーに参加。M shed 周囲の見学後。

M shed は 2011 年にリニューアルオープンしたブリストル市立の社会産業博物館である。以前は、Bristol Industrial Museum という名前であり、筆者が 2003~2005 年に保存修復大学院在学中の 2 年次のときに、論文の材料としてとりあげ博物館における Working Objects の利点と不利な点について論じた場所である。

M shed (M 格納庫の意味) の名前の由来は、もともこの場所が格納庫として使われており、端の格納庫からアルファベットで番号が振られていた。ここは M の番号が振られていたので、このままその名前を博物館の名前とし

て採用することにした。

改装再開館にあたり、彼らが新しく設置したものは、貸イベント室とオープン収蔵庫である。貸イベント室は建物の3階に位置しており、ブリストル港と街が一望できる。会社のパーティーやウェディング等に使用されることを目的としており、大きな収入源となっている。

博物館は3階建てで、ブリストル港に面している。ボートを3点保有しており、イベント時に実際にボートツアーが行われるという。また1点の機関車と4点のクレーンも博物館の目の前にあり、管理をしている。展示は、Bristol Places、Bristol Life、Bristol Peopleの3つの常設展、特別展室（訪問時には『ウォレスとグルミット』でおなじみの地元企業アードマン社の特別展が開催されていた。有料。）がある。展示はふんだんにオブジェクトが展示され、展示品に触れて楽しめるハンズ・オン展示が多く導入され、子供たちに大人気であった。また、有名なバンクシーが係留中の船側面に描いたバンクシーの絵を切り取った展示もあった。船の保有者が絵の盗難＝船の沈没を恐れ、博物館に依頼して、博物館が作品を切り取り、船を補修し、作品を保管・展示することとなったそうである。

改装展示時には、ブリストル市立の他博物館・美術館の専門家らも展示計画から展示まで一緒に携わり、苦労話をブリストル市立博物館美術館のKate Newnham氏からも聞くことができた。展示ケースは最新のものを注文したはずが、とても脆弱で、展示に使用するはずのネジ穴が全く機能せず新たに穴をあけた話や、作品に動きをつけるため展示ケースの天井部分からテグスでぶら下げる際に苦労した話など、貴重な体験談を聞くことができた。

また、様々な背景の人々に来館者として来てもらうための社会的な取り組みなどにも力を入れている。ブリストルはかつて奴隷貿易港としても機能しており、負の歴史にも焦点を当てている。地元のたばこやチョコレート工場なども展示対象である。

一般向けの収蔵庫ツアーにも参加した。ボランティアによる1時間の無料ツアーであり、興味のある人はだれでも参加できる。筆者が参加したときは、他に3名の英国出身者の参加者がいた。筆者はかつての調査時に収蔵庫に入ったことはあるのだが、ボランティアによる収蔵庫内のオブジェクトを展示品のように説明するツアーにはとても興味を持った。フラッシュを使用しな

ければ写真も自由に撮影できる。一般の利用者は、博物館の裏側にとっても興味をもっており、オブジェクトと参加者・主催者と場所の安全性が保たれるのであれば、このようなツアーは啓もう活動の一つとして増やしてもいいかもしれない。しかしながら、産業・社会系のオブジェクトと国立美術館が所有する美術品の価値は全く違うものなので、慎重に検討する必要がある。



外観



多くのハンズ・オンおよびデジタル展示



収蔵庫ツアーの様子
(黄色いシャツがボランティアの説明者)



バンクシーの絵が描かれた船の側面の一部と
紹介パネルおよびビデオ

(ウ) イギリス サリー州 ジャクソン彫刻保存修復有限公司

8月22日(木)外部組織訪問調査。Jackson Sculpture Conservation Ltd. (Surrey州 Egham。ロンドンより電車で約40分)経営のMs. Tessa Jackson。英国認定保存修復家。モダンおよびコンテンポラリー彫刻および立体物保存修復を専門とする。フリーランス保存修復家として様々な事業に携わる他、実践的な保存修復を学べることで定評のある City and Guilds School of Londonでも講師を務める。また、大学や英国保存修復学会主催の講義やコースを担当。2010年から保存修復会社を経営。最近、広い工房に会社を移したばかりである。長い経験を持ち、様々な困難なケースの保存修復に携わってきたため、イギリス保存修復学会でも学会誌に何度も事例を取り上げられたり、その修復学会主催の保存修復専門家向けコースの講師を多くされている。2018年2月にイギリスの保存修復専門大学院(筆者の母国でもある) West Dean Collegeで開催された短期コース「Care of Sculpture」にて、リンジー・モーガンと共に講師を務め、そのコースに筆者が参加したことから知り合いとなった。

モダンおよびコンテンポラリー彫刻および立体物を専門とする保存修復家の数は大変少なく、特に個人で活動する Jackson 氏のようなフリーランスの保存修復家はイギリスでは殆どいないそうである。おおまかな区分けであるが、イギリスでは大きな博物館(大英博物館など)では彫刻・立体物修復という区分けではなく、材質毎(金属、石材、現代材料ープラスチック等)に分けられていることが多い。美術館や比較的小さな博物館などでは、彫刻・立体物として3D作品を材質問わず保存修復する傾向が強いように思われる。Jackson 氏の強みとしては、作品の材質(異素材組み合わせの作品についても)や大小問わず対応することができ、また、場所(工房で受けることも現場に赴くこと)も問わずに保存修復に対応できることである。繊細で脆いセルロイド等でできた作品を修復したり、大きな屋外彫刻を修復したりすることもできるのである。

工房は、ロンドン郊外 Surrey 州の Egham にある。工業・美術系の大型貸コンテナが連なる工業地区の一角に構えている。近隣のコンテナには芸術家や工業機器販売業者などが入っている。作品の安全上、彫刻・立体物の保存修復会社であることは近隣には話していないとのことである。セキュリティーは徹底しており、何重にもバックアップの方策がとられている。

保存修復の会社を経営することの大変さを初めて知ることとなった。

Jackson氏は会社を一人で経営しており、保存修復も自分で行うことが多い。知り合いの保存修復家と組んで作業を行うことも多々あるという。工房のセキュリティーに対応したり、夏はコンテナ内（特に2階のロフト部分）が大変高温になるため現在空調導入を検討したりしているという。組織に属していれば専門の人が行う毎年電気系統の検査を受けたり、建物内の改装をしたり、化学薬品を購入・管理および足場や大型機器を利用するための資格を個人で取得する必要があるが、もちろん全ての運営管理に携わる事務作業も一人でやる必要がある。固定資産税や工房の家賃を含めると、1週間に1,200英ポンドを稼がなければ割に合わないということである。近年は、あまりにも多くの大型作品の現場での保存修復作業を請け負っていたため、手・腕、方の使い過ぎによる手術を2回も受けているという。今後は大型作品の現場作業を減らし、大きく新しい修復工房で受ける作品を増やすべく、現在、会社のウェブサイトを作成しているそうである。

個人保存修復会社の管理経営と保存修復作業の同時並行を一人でやる大変さにもかかわらず、Jackson氏の素晴らしいところは、彼女の経験した知識や技術を惜しみなく同行他社と情報共有しているところである。筆者のような工房訪問にも快く対応してくれたり、氏が講師を務めるCity and Guilds School of Londonからもインターンを受け入れたりしている。また、彼女のオフィススペースの一角には、保存修復やアーティストに関する本や資料が所狭しと並んでいる。これまでに行ったコース資料、これまでに自分が参加したコース資料、インターネットで何でも調べられるようになる前の時代に集めた古い技術的資料など、現在整理中であるという。工房内でやるコースや訪問者がいつでも必要な情報を得られることを希望されていた。

日本の博物館・美術館も殆どが保存修復部門を持たず、職員として保存修復家を雇用しているところは僅かである。Jackson氏のように個人経営保存修復会社やフリーランスの人材に頼らざるを得ない状況である。このような人材の存在なくして、日本の博物館・美術館の運営は成り立たないといっても過言ではない。このような個人経営の人材を保護していく方策も国として考えなくてはいけないと痛感した。



使用道具の一部



簡単に使用できる展示サポート用板

(エ) イギリス オックスフォード アッシュモリアン博物館 保存修復部門

9月12日(木) 10:30-14:30 Daniel Bone 氏 (Head of Conservation Department)、
Ms. Alexandra Baldwin (Manager of Object Conservation)

最初に Bone 氏から組織全体と保存修復部門全体の話聞いた。アッシュモリアン博物館は、オックスフォード大学の4つの大学博物館の一つであり、美術と考古コレクションを有している(他の3つは、科学歴史博物館、自然史博物館、ピット・リバー文化人類学博物館)。1682年にエリアス・アッシュモールが大学に寄贈したコレクションを基礎としており、イギリス初の一般公開博物館であると同時に、世界初の大学博物館である。

部署としては、保存修復部門の他に、オペレーション(Visitor Experience、直訳は来館者経験だが監視や守衛を指す)、Public Engaging (直訳は一般を引き付けるものであるが、学習や貸出・借入などのローン指す)、コレクション(学芸部門。新しいセクションとしてデジタル・コレクションも増えた)、テクニカルチーム(展示室の展示、ライト、コレクションの移動等)がある。HR(Human Resources、人事)機能は、他3つの博物館と共有している。1905年には修復を目的とした部屋が博物館に作られ、1999年までは古美術コレクション部門の中に保存修復が存在していたが、現在は独立している。正式には、Bone氏は二人目の保存修復部門長であり、2016年12月からこのポジションについている。

また新しい試みとして、クリーナーというポジションも最近設けた。展示室にあるコレクションの埃払いを行うスタッフのことであり、ある程度コレクションの扱いに慣れた人を雇用し、博物館内で保存修復家が安全な埃払い方法のトレーニングを行い、コレクションの予防保存に努めようという試みである。これから人材の雇用とトレーニングを行う予定になっており、いかに機能するかは今後注目したい。

博物館の資金源であるが、主にオックスフォード大学から運営資金が提供されている。その他に、博物館が開催する特別展などからの資金収集、個別のプロジェクト、コレクションの貸出、その他の補助金・助成金などがある。また、グループ博物館全体で年間3~4回実施している保存修復部門ツアーからの僅かな収入もあるそうだ。

オックスフォード大学の4つの博物館には、それぞれ保存修復部門が設けられており、各博物館のコレクションをその博物館内で保存修復できるようになっている。通常は個別に各博物館で保存修復を行っているが、困難な事態に直面した際などはお互いの館で助け合い、知識や技術交流ができることもグループ博物館のメリットであるそうだ。

アッシュモリアン博物館は、61 ミリオンポンド（ヘリテージ・ロタリー・ファンドという文化遺産保護のための宝くじによる資金 15 ミリオンポンドを含む）をかけて展示室改装が行われ、2009 年に再開した。以前に比べ展示室は倍の広さになり、39 の新しい展示室に生まれ変わった。新たな展示の中には、保存修復やその歴史、コレクションに使用されている材質や技術にまつわる啓蒙展示も設けられ、一般の人々にとって博物館で保存修復がいかに行われているのか、どのような考えで行われているか、なぜ重要なのか、などが理解し易く展示されていた。また、近年の保存修復倫理と同時に、その倫理が議論される以前に保存修復が施されたオブジェクトなども展示されており、来館者自身に考えさせる内容にもなっており、各個人の意見を尊重するイギリスらしい展示であると感じた。

アウトリーチでアッシュモリアン博物館の素晴らしいところは、博物館のウェブサイトが大変充実しているところである。

<https://www.ashmolean.org/conservation>

美しい画像のビデオや写真、分かりやすい箇条書きの文章をふんだんに使用するなど、実際に博物館を訪れることができなくても、保存修復や館内の様子が手に取るように想像できる出来栄である。こうした国内外の来館者以外の人へのアピールの重要性が理解でき、こういったポイントを押さえた啓蒙活動にも投資すべきであると感じた。

保存修復メンバーとしては、オブジェクト保存修復家だけでも正職員が 3 人、期限付き職員が 1 名の計 4 名在籍している。その他に、保存科学を専門とする予防保存修復家が 1 名、絵画修復家が 1 名、染織品修復家が 1 名、紙修復家が 3 名、博物館技術者が 3 名、展示用マウント制作者が 1 名、事務の方が 1 名のほか、学生インターンやボランティア保存修復家など数名が保存修復に携わっている。

保存修復の施設は博物館建物の内部（上層階）に位置している。一続きの保存修復室に、オブジェクト保存修復、絵画保存修復、額装、予防保存、展示用マウント制作のそれぞれの分野が同居している。隣室には染織品保存修復のみの大型作品保存修復は博物館建物の地下にあり、短期契約の保存修復家を使用できるプロジェクト保存修復室も博物館建物の内部にある。一方、染織品保存修復と紙保存修復室は別棟で行っている。簡単に移動できない大型作品については展示室内で保存修復作業を行うこともある。

保存修復の仕事としては、貸出や展示（特に特別展）のための保存修復、調査研究、偶発的な保存修復作業、収蔵庫内の作品状態調査、予防保存のための展示クリーニング、展示室のメンテナンス、若手のトレーニング、外部に対して行うアウトリーチ活動など

大変広範囲な活動が含まれる。特に特別展には力を入れており、通常2年間かけて準備を行う（1年間は保存修復作業、1年間は展示やケース準備）。外部の展示業者やデザイナーと共に展示を作り上げたこともあるが、近年はなるべく館内の職員で準備、作品点検、展示まで行っている。

様々な作業を効率よく進めるためにしていることは、通常業務を月毎に記録して振り返ることである。将来の綿密な計画立案に備えている。業務の記録は大変骨の折れる作業であるが、業務を明確化することで、冷静に見つめなおすことができ、無駄を省いたり、改善点を見出したりすることが可能になる。他にも、館外への作品貸出のエクセルデータ管理にハイパーリンクで状態調査を付けることで、誰もがファイルを探せるようにするなど、ちょっとした初期投資をすることで、その後の仕事量を軽減できるような工夫がなされていた。



概観



開放的な新展示室



絵画・立体物等保存修復室



染織品保存修復室



新展示の一つ：保存修復に関する展示



(オ) イギリス サリー州 ハンプトン・コート・パレス (ヒストリック・ロイヤル・パレス・グループの一つ) 保存科学部門、および、保存修復処置部門

9月17日(火)10:00-17:00に保存修復処置マネジャーで日本人の高見美花氏と予防保存マネジャーのDr. Constantina Vlachouを訪ね、お話を伺うとともに、施設を見せていただいた。Dr. Vlachouは以前大英博物館で博士課程の研究生として保存科学部に在籍していたことがあった関係で、8月1日(木)に「Current Conservation Science project @ Historic Royal Palaces (ヒストリック・ロイヤル・パレスにおける現在の保存科学プロジェクト)」について1時間ほどトークをしていただいた際に聴講し、様々な工夫をされている様子を伺った。トーク後にお声掛けし、今回の訪問がなかった。同時に、前述のブリストル市立博物館・美術館の主任学芸員のKate Newnham氏からも日本人の高見氏を紹介され、お二方を同時に訪ねることになった。

ハンプトン・コート・パレスはロンドンから12km南西部のテムズ川沿いに位置しており、歴史的な宮殿として有料で一般公開されている。年間300万人が訪れる人気の観光スポットの一つである。6つ存在するヒストリック・ロイヤル・パレスグループの一員であり、ハンプトン・コート・パレス以外に、ロンドン塔、バンケッティング・ハウス、サウス・ケンジントン宮殿、キュー宮殿、ヒルズボロー宮殿がグループである。

ハンプトン・コート・パレスは、ヘンリー8世の住まいであったため、日常生活で使用する調度品を宮殿内に展示しつつ、建物の劣化にも気を配る必要がある。年間2日間しか閉館日がなく、363日は開館している中、展示ケースに入っている展示は全くないオープン展示であり、冬の暖房以外の空調も全くない。そのためコレクションの保存修復と予防保存はよく計画立てて行う必要がある。

ハンプトン・コート・パレスは公益財団であり、100%自己収入で活動を行っている。イギリス文化省と10年ごとに契約を結び、女王から運営管理と一般公開活動を託される形になっている。全ての保存修復プロジェクトは、契約を結んで行うことになっている。収入源は、入場料(大人一人21.3ポンド、3,000円近い)、寄付、撮影などのための有料場所貸し出し、コレクションのライセンス料、個人寄付者・後援者からの寄付で成り立っている。

ハンプトン・コート・パレスには全部で56人が在籍しており、保存修復室だけで40名程がいる。保存修復部門は「保存科学(3名)」、「予防保存(14

人)」、「保存修復処置(18名)」である(詳細作業は後述)。その他にレジストラーとして貸出・借入、記録、新収蔵、廃棄、保険・法律問題等を扱う「コレクション管理」、デジタル情報を扱う「情報管理」室が存在する。

上記の中でも「保存修復処置」室は4チームに分かれており、染織品が3チームに分かれて(タピストリー、コスチューム、ベッド等の調度品)と他全ての作品をケアするチームに分かれている。染織品の保存修復チームは、一つのチームへの所属に留まらないよう、2~3年に一度メンバーを入れ替えて、スタッフ全員が全ての大きさや形状の異なる染織品の全ての保存修復作業に対応できるようになるよう配慮している。また、タピストリー展示では足場の上での高所作業が必要なことから、保存修復メンバー全員が高所作業の資格を取っているという。今回の訪問では、染織品3つの保存修復室を見学し、保存修復家からご自身の現在行っている修復についてご説明いただいた。また、今回は見学をしなかったがここにはプールのような形状のタピストリーを水洗いできる巨大な施設があり、その洗浄作業の様子やタピストリー展示をYouTubeで公開しており、保存修復の仕事や施設の啓蒙に努めている。

洗浄の様子：https://www.youtube.com/watch?v=ASbcok7m_y0

再展示の様子：<https://www.hrp.org.uk/about-us/conservation-and-collections/conservation-research/#gs.auct6m>

保存科学室は、マネジャーのVlachou氏を含め3名が所属している。業務としては、1. 状態調査と記録、2. 材質調査と劣化機構研究、3. 環境調査(埃堆積調査)が主な仕事である。

展示品の主な問題は、温湿度の不安定さ、日光の存在、振動、埃の堆積である。日光の影響に関しては、タピストリーが全壁面に展示された部屋は日光が3方向から入ってくるので、窓には紫外線カットフィルムを張ることで光量を調整したり、通電することで半透明になるスマートフィルムを導入したりすることで直射日光を避けている。窓枠が金属の場合はスマートフィルムを磁石で止めることも可能である。このスマートフィルムの良い点は、タッチパネルで遠隔操作したり、太陽の動きをあらかじめインプットしたりしておけば、スマートフィルム On/Off の遠隔操作が可能である。

さらに、全タピストリーにはセンサーがついており、埃堆積調査、絶対湿度と気温、光による影響、振動を調査研究している。そのセンサーは、タピストリーの全面の上中下に大胆に設置されているものの、驚くことに遠目には全く気にならないのである。

日本では、このような状況であれば、空調を導入してしまうのが一番楽な方法だと思ってしまいが、このような地道なモニタリングにより状況把握を行い、長期間かけてデータを集めて研究を行い、みんなで解決方法を探る姿勢は見習いたいと思う。



Hampton Court Palace 外観



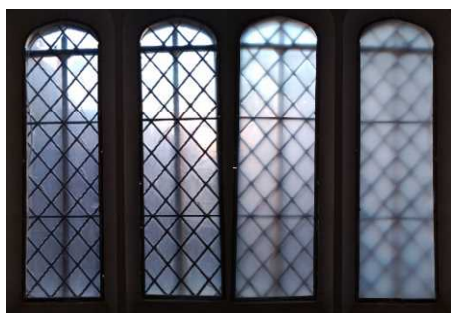
染織品の褪色について説明して下さる
 Dr. Constantina Vlachou



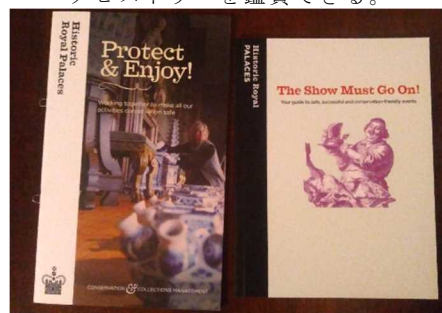
Hampton Court Palace 内展示室の一つ。
 3方向の窓から陽が入る。
 タペストリー前に僅かにモニターが見える。



褪色を計測するモニター。
 距離を置くと気にならずに
 タペストリーを鑑賞できる。



展示室内の窓に設置された電気切り替え
 UV カットパネル
 (左) 透明なパネル、(右) 半透明に切り替えた場合



頂いた小冊子2冊。
 城内で働く保存修復関係者以外のスタッフへ
 調度品保護のための注意が書かれている。

(カ) 「ICOM-CC Meta12019 (国際博物館会議 保存修復部門 金属保存修復ワーキング・グループ) トリエンナーレ・ミーティング」 (於: スイス ヌーシャテル ホイテ・エコール保存修復大学)

2019年9月2日(月)～9月6日(金)までスイスのヌーシャテルにあるホイテ・エコール(新しい大学の意)保存修復大学で行われた国際博物館会議 保存修復部門 金属保存修復ワーキング・グループのトリエンナーレ会議に出席し、日本の共同発表者とともに口頭発表を行ってきた。日本で開催された ICOM 京都大会と偶然に日程が重なってしまい、初の日本開催大会に出席できなかったことは残念でならない。

毎回開催地が変わり、ヨーロッパ圏内とヨーロッパ外の地域で交互に開催されている。主にヨーロッパや北米からの出席者が多く、南米、アフリカ、オーストラリア、アジアの出席者は毎回数えるほどである。今回はヨーロッパ圏内での開催ということもあって200人ほどの出席者があった。その中で日本人は、3年前までは筆者のみであったが、今年は筆者の共同口頭発表者を含め4名が出席した。

ほぼ毎日朝9時～17時まで会議場での口頭発表を聴講し、(木)夜の選択制の夕食会を除く17時以降もプログラムが組まれていた(1日目のウェルカム・パーティー、2日目の大学保存修復ラボ見学、3日目のポスターセッション、最終日のフェアウェル・パーティー)。使用言語は英語、口頭発表の持ち時間は質問対応とPCのプレゼン投影準備を含め25分であり、60名以上いるポスター発表者も3分間だけの壇上での口頭説明を行い、大変内容の盛り沢山の大会となった。

筆者は、金属を専門とする保存科学者の元同僚と共に、2016年に参加した「高徳院国宝銅造阿弥陀如来坐像 保存修理事業」について口頭発表を行った。1日目の1番目、今大会最初の口頭発表であったため、参加者の注目が集まった。更に対象物の大仏の大きさやユニークさ、事業の重要性が大変印象強かったようで、会議期間中には様々な方からお声がけいただいた。お陰で様々な国の金属保存修復家や保存科学者と知り合い、意見交換を行うとともに、日本の金属製品の保存修復・保存科学分野の実践的な事業を国外に紹介する絶好の機会となった。



筆者の口頭発表の様子



会場となった
ホイテ・エコール保存修復大学



2日目の開催地である大学保存修復学部のオープン・ワークショップ



3日目のポスター発表会場の様子（右側の写真は、大英博物館の同僚によるポスター発表）

（4）研修成果の活用計画

本研修では、大英博物館を中心としたイギリスの博物館・美術館におけるコレクションの先進的な保存修復マネジメントを調査研究するために、各組織での資料調査や口頭でのインタビュー、および、施設訪問をさせていただき、多忙にもかかわらず、貴重な時間を割いて、包み隠さず組織や保存修復の現状や問題など大切な情報を惜しみなく共有してくださった皆さんにここで感謝申し上げたい。

勿論、先進的と思われる専門的技術や組織体制も多々見られたが、筆者がコントロールできる範囲で参考にしたいと思う事項は、すべて職員の小さな努力や工夫の積み重ねの上に成り立っているということが分かった。

まずは、研修で得た成果である沢山の情報を、館内・館外を問わず、保存修復に関わる専門家らと勉強会のような形で情報共有を行いたいと思っている。

筆者の勤務館は、職員数は少ないものの、経済的な心配をすることがないことは幸運であると改めて感じた。イギリスでは大英博物館をはじめ軒並み予算の確保で相当の時間を割いているマネージャーが大変多い。このメリットを最大限に生かし、いかに明確な計画を立てて、円滑に保存修復作業を進め、ひいては美術館全体の運営に対し保存修復室がどう貢献できるのかを同僚と共に考えて行きたい。

欧州における金属文化財の復元と保存修復についての調査研究については、国内外の専門家とともに調査を継続していく予定である。